

## 2009年7月19日 主日礼拝メッセージ（北栄教会）

聖書箇所：ルツ記1章1～14節

説教題：主にすがりなさい

はじめに

私たちは、人生の中で思いがけない悲しみに遭遇することがあります。なぜこんな苦しみに会わなければならないのか、どう考えても理由がわからない。そんな理不尽な苦しみに出会い、悩むことがあります。

### 1 ナオミの苦しみ

今朝開いておりますルツ記には、次から次へと不幸に見舞われていった一つの家族のことが記されています。発端は、イスラエルの地に起きた大きな飢饉でした。食べるものを求めて、モアブの野に向かいました。飢饉が去ったらもう一度自分の国に戻ろうという計画でした。ところがナオミの夫であるエリメレクが志半ばで死んでしまいます。

ナオミは一生懸命に働き、残されたふたりの息子を育て、地元の娘を嫁と迎えます。やっと将来に希望が開けていくときでした。ところが、そんな喜びもつかの間、ふたりの息子も相次いで死んでしまいました。

ここは異国の地です。誰も頼る者もいなければ、助けてくれる者もいない。すべての希望がもぎ取られてしまった。これからどう生きていけばいいのか、ナオミは苦しみのトンネルの入り口に立たされることになります。

### 2 どうして不幸なことが起きるのか

#### (1) 悪いことをした罰？

ここを読んである方は考えるでしょう。どうしてナオミの家族はこんな不幸な目に会

うのだろうか。もしかして神の罰が下ったのではないか。実際、ユダヤ人の言い伝えによれば、そのような説明がされているそうです。この家族が、神の約束の地であるイスラエルから離れてしまったのが良くなかった。それに加えて、ナオミがふたりの息子に地元であるモアブ人の女性を嫁がせた。イスラエル人はモアブ人のことを一段低く見ていましたから、そんなモアブ人を嫁に迎えたとはとんでもないことだ。そういういくつかの罪によって、彼らは罰を受けたのだ。そのように説明する。

苦しみは神の罰である。その結果、苦しみには何の意味もないという結論で終わってしまいます。果たしてそうなのでしょうか。

#### (2) ナオミの理解

ではナオミは、この苦しみについてどう説明しているのでしょうか。13節でこう言っています。「主の御手が私に下ったのですから。」20節にもあります。「全能者が私をひどい苦しみに会わせたのですから。」

この苦しみは神の手によってもたらされたものと告白しています。皆さんこれを聞いてどう思いますか。聖書の神は何とひどい神だと思わないですか。聖書のどこを捜しても、ナオミの家族が神からこのような扱いを受けなければならない理由は書かれていません。ナオミたちは、言わば理不尽な苦しみを受けているのです。

### 3 ナオミの信仰

ところが、ナオミはこんな目に会いながらも、不思議に神を捨てようとはしません。6節。「そこで、彼女たちは嫁と連れだって、モアブの野から帰ろうとした。モアブの野でナオミは、主がご自分の民を顧みて彼らのパンをくださったと聞いたからである。」

イスラエルからは、今、豊かな実りが与えられている。そんなニュースが耳に届きました。確かに神は私たちに苦しみを与える方かもしれないけれど、でも恵みも与えてくださる方だとも考えています。

また、8節でもナオミは嫁たちにこう言っています。「あなたがたは、それぞれ自分の母の家へ帰りなさい。あなたがたが、なくなつた者たちと私にしてくれたように、主があなた方に恵みを賜り、あなたがたが、それぞれの夫の家で平和な暮らしができるように主がしてくださいますように。」

あくまでも、主は恵みを与えてくださったという信頼を忘れてはいません。

ナオミは、そんな神の恵みを信じてイスラエルに戻る決心をします。ナオミは、ふたりの嫁たちを呼び、あなたがたは自分の実家に帰りなさいと勧めます。イスラエルではモアブ人は歓迎されません。いろいろな差別があつてつらい目に会うことが予想されました。それよりも地元に残つて暮らしていく方が幸せだろうという判断でした。

### 4 ルツがナオミの中に見たもの

#### (1) ルツの決心

ふたりの嫁のうちオルパは、実家に帰ることになりました。ところがルツはナオミといっしょに行くのだと言って譲りません。ナオミは、とうとう根負けしてルツをイスラエ

ルに連れて行くことにします。

ここでまた疑問にぶつかります。なぜルツはいっしょに行きたいと言ひ張つたのでしょうか。誰が考えても、外国に行くよりも実家に戻つてやり直した方が良いに決まっています。

ルツが若くて向こう見ずであつたということではありません。ルツ記の先を見ますと、ルツは物事を注意深く考え、行動するタイプの女性であることがわかります。何か確かな根拠があつて、ルツはナオミといっしょに行きたいと強く願つているようなのです。

#### (2) 主にすがる信仰

14節に、「ルツはナオミにすがりついた」と書いてあります。このすがりつくという言葉、特別な言葉です。創世記2章にこんな御言葉があります。「それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合ひ、ふたりは一体となるのである。」この中の「結び合ふ」と「すがりつく」は同じ言葉です。夫と妻の結びつきの強さを教えるために、イエスはこのみことばを取り上げ、「もはやふたりではなくてひとりなのです」(マタ19:6)と説明されています。

そうしますと、ルツがナオミにすがりついたその姿は、尋常ではないくらいの強さであつたと想像されます。絶対に離すものか、離したくない。食らいつくつというのでしょうか。そんなすごみさえ感じます。

何がルツをここまでせき立てるのか。ルツは、ナオミの中からわき出てくる何かに心を引かれています。何に心を引かれているのか。ナオミの振る舞いの中に考える糸口があるように思います。

三人が、これからのことを話し合つている

ときでした。あまりの悲しさに声を上げて泣き出します。そんな嫁たちを見て、ナオミはこんなことを言います。「あなた方の夫になるような息子たちが、私のお腹にいるというのですか。」「こんな年寄りが今晚でも夫を持ったら。」「息子を産んだとしても、成人するまで待ってくれるのかい。」

皆さん、このナオミの言葉をどんなふうに聞きましょうか。ナオミは、ここで嫁たちをなんと笑わそうとユーモアを精一杯語っているのです。一家が散り散りばらばらになるうという悲惨な状況です。けれども、ナオミは何とかみんなを元気づけようとしているのです。

これはルツにとって驚きでした。普通こんな場合どうなるでしょうか。感情のコントロールを失って激しく泣き叫ぶか、怒りと憎しみの言葉を誰彼となく叫び続けるか。いずれにしてもナオミのような経験をしたら、誰だって絶望してしまうでしょう。

ところがナオミは違うのです。夫を失い、息子たちを次々に失った悲しみは深い。それは確かでした。けれども、希望を失っているのではない。嫁たちの将来のことにも心を砕き、祈ってくれている。こんな苦しみの中でも将来に希望を見ようとしている。その希望はどこから来るのか。ルツの視点は次第にそこへ向けられていきます。

ナオミが「主」というお方を信じていることを、ルツは次第にわかってきました。最初は、聞き慣れない外国の神にしか思われませんでした。ナオミの夫が元気だった頃、息子たちが元気だった頃、ナオミの信仰には気がつきませんでした。でも今、ナオミは苦しみに出会ったことにより、その信仰が鮮やかに光り輝き始めていくのです。ナオミは苦しみ

に出会って、以前のナオミとは違うナオミに変えられているのです。

聖書にこんな言葉があります。「患難は忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」(ローマ5:4) このみことばのとおりなのがナオミに起こっています。そのような力はどこから来るのか。若いルツにとって、それは不思議な理解の及ばない、奇蹟に見えたと思うのです。

### (3) 神のご計画

やがてルツとナオミは、イスラエルのベツレヘムという町に戻ります。ベツレヘム、「パンの家」という意味でもあります。以前は食べるパンにも困り果ててモアブに逃れました。そして今度は、パンを求めてベツレヘムに戻って参ります。

ルツはやがてある男性と結婚します。その子孫にダビデが産まれて参ります。そしてその先にイエス・キリストが誕生します。この方がお生まれになったのは、このベツレヘムという町でした。

ナオミの一家に起きた不幸な出来事。歴史に埋もれてしまうような苦しみの物語に見えました。けれども、神の視点から見ると、この苦しみに決して理不尽な苦しみではなかった。苦しみにも確かに大切な意味があったのだと言うことを教えてください。

## 5 苦しみにも意味がある

### (1) 苦しみに向き合わない生き方

苦しみに意味がある。こう言うと多くの方はとまどわれると思います。もちろん、積極的に苦しみを求めなさいと言っているわけではありません。

苦しみは、求めなくても向こう側からやってくる。これは、誰だって認める事実です。苦しみが避けられないというのならば、私たちは苦しみをどのように受けとめるのか。そのことだけはいつも考えておくべきではないかと思うのです。

もし苦しみに対する備えのないままであるならどうなるでしょう。苦しみの原因を探し出さなければ気が済みません。苦しみの原因が他人であるというのなら、その人を赦すことのできない心で一生苦しむこととなります。また苦しみの原因が自分であるというのなら、自分を責め続けて一生苦しみ続けなければなりません。いずれも望みというものはどこにもありません。恨みと憎しみをかかえ続けたままになります。苦しみに向き合うと言うよりも、苦しんだことを激しく憎んでいく、そんな人生になってしまいます。そんなつらい心をかかえている方が多いのではないかと思います。

## (2) 苦しみに向き合う生き方

しかし反対に、もし苦しみにも大きな意味があるのだとするなら、どうなるでしょう。もちろん、その意味がすぐにわかるわけではありません。わからないけれども、このことも神の御支配の中でもたらされた苦しみなのだという信仰です。

そうは言っても、皆さんの胸にはこんな疑問がつかかえているはずです。「どうして私が苦しみを受けなければならないのか。神が私に苦しみを与えるなんて、とんでもないことだ。そんな神ならごめんだ。」

私もかつてそう考えていました。しかし、よく考えてください。私たちは本当に苦しみを受ける理由が何もないというのでしょうか。

か。神の前に正しい人などいるのですか。私たちは心の中でどんなことを考えていましたか。

自分にいやなことをする人がいたりすると、「あんな人は死んでしまえ」と簡単にのろっている。子どもには嘘をついてはいけなと言いながら、自分は、平気で嘘を言う。そこまでなくても、言わなければならないことを夫や妻に隠したりする。あの人が持っているすてきなバッグ。見た途端にひどいねたみの感情が湧いていく。

そんなひどいことをしていることを忘れ、平気で言うのです。「どうしてこの私が苦しみを受けなければならないのか。」よくよく考えれば、私たちは苦しみを拒む権利は一つもなかった。たとえ苦しみが襲ってきても、文句の言えない立場であることを思い出していたらいいと思うのです。

ナオミは、苦しみは神が与えたものだと言白しました。ナオミは自分は神の前に正しい者ではないことを正直に認めたということです。

ナオミはそう言いながら神を恨んだりはしません。むしろ、神への信頼を強めていきます。なぜか。神の前に正しくない自分だとへりくだる者を、神は決して見捨てない方である。ナオミはそのことを信じています。だから、苦しみに向き合えるということです。だから、苦しい中でも将来に希望を覚えることができる。ルツは、そのようなナオミの信仰に引きつけられていくのです。

## (3) 神に出会う場所

まとめましょう。私たちは、苦しみというトンネルの前に立たされる時が来ます。そのトンネルの前には二つの選択肢がありま

す。

一つは、自分は苦しみを受ける理由は何もないと言い張って、トンネルに入ることを、あくまでも拒否し続けるという選択です。

もう一つの選択肢は、私は神の前には正しい者ではなかったと告白し、苦しみのトンネルに向き合う。そういう決断です。どちらを選ぶのかは、すべては私たちの決断にゆだねられています。

真っ暗闇のトンネルに入る。誰だって恐ろしいことです。しかし、トンネルの中に踏み出したその瞬間、私たちは驚くべき事に気がつきます。主がトンネルの向こう側から私たちに近づいてくださる。どうして、主は苦しみのトンネルの向こう側におられたのでしょうか。

主イエス・キリストは、神でありましたが、人間のお姿をとられて、十字架で苦しみを経験されました。主は私たちよりも先に、私たちの経験するあらゆる苦しみを経験しておられるのです。だから、苦しみのトンネルの中に立っておられたのです。

そうしますと、このトンネル。ひとりぼっちではないということです。真っ暗闇でもない。確かに暗やみは濃いけれども、しかし光がある。

ルツは、ナオミを通してかすかでしたが、光が見えてきました。この光を信じたいと願いました。ナオミにすがりつきました。ナオミの中に見える神にすがりつきました。

皆さんもすがっていただきたいと思うのです。もし苦しみの中にあるのであるのならば、主が皆さんのそば近くに歩いておられることを知っていただきたいのです。

神は、すがりつこうとする者を見捨てるお方ではありません。しっかりと、神御自身が

私たちの手を握り、決して離そうとはなさいません。苦しみというトンネルの中にすでに主が立っておられます。この方が、小さくなられ、弱々しい姿をとられて、私たちといっしょに苦しもうとされています。